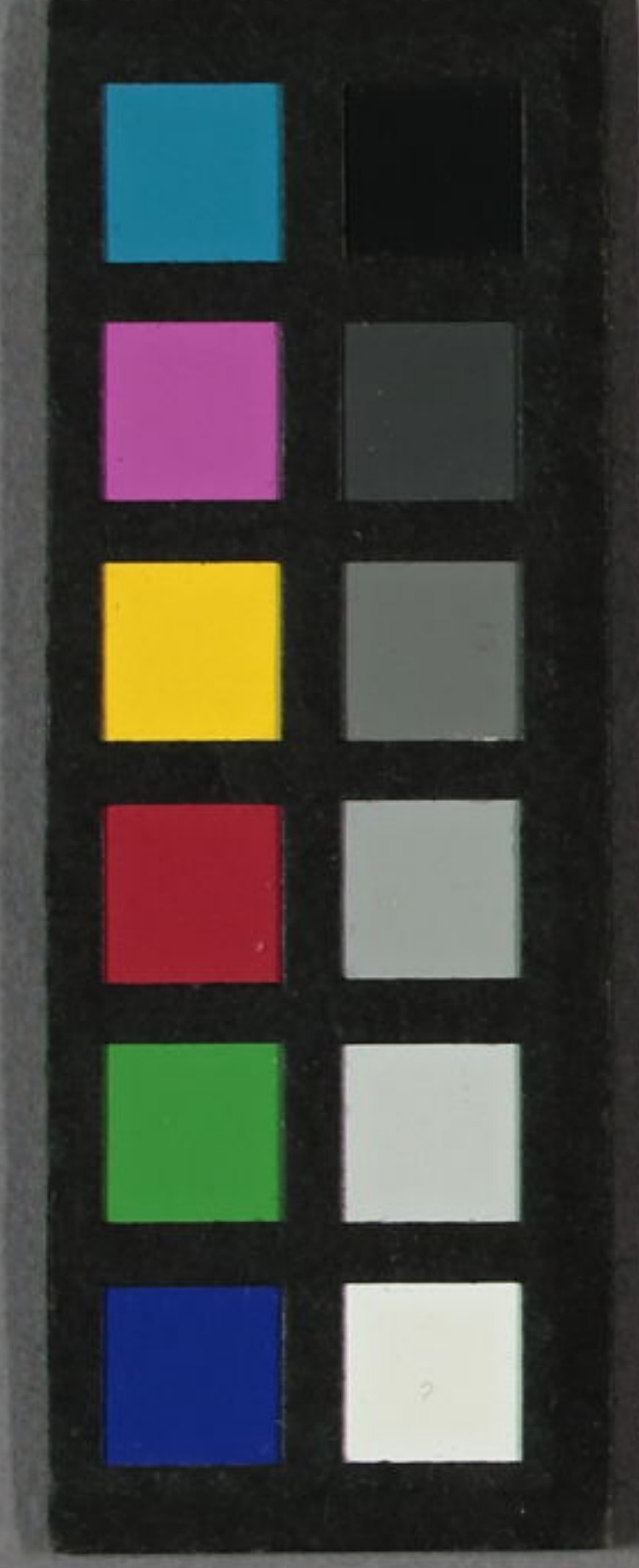


俳諧一葉集

一



序

佻諧者死常乞而中格妙門也
世人妄謂一時戲言綺語也豈
丈夫耶蓋能致知而達理之常
變氣之順逆固守自得遊心於
太虛別語默作之無有不善故



棄名利而造之靜安可獲焉誠
意而為之身脩家整舉不外乎
此矣昔從芭蕉啟正風雲從風
靡今雖其流間有清者泝源者
亦不少也屬者社友集錄翁一
期所嘯以為小冊以便卷懷可

謂夜行珠矣傳曰法不自顯弘
之在人湖子其人乎是為序
文政十亥歲四月

仙波僧正書于蒼筤

林中之谷神齋 同 蘭

俳諧一葉集序

花よりぬくくうひすあ子す玉桂のあをもきけはめ
生としいけさあひのねの歌をもよおさうけさあや
窓よりきく人子よまを詩と俳諧もくはさうと
あさくくもく(芭蕉)夜柳青菊ハ三十あまうは
うらうら俳頂福沙うつふく春禪しあさひさう
あれあうの標に俳諧の意をきく候して七情よくは
あひをさるふはけうぬく潭池を流してはるる
古人よりこの弊風を轉して古今集のたのび

歌子もやあふ杜村山家集の編をあたえて貞
享の初季付しめし狂句予既外の洒言を散一人
情を迷ひし草一又予既記録する多し予既予
道の秋とゆふられふ其法生あまう四海にあらは
るまよふも御も知棕郎と柳書をも梅子門中
子國に予とあしして其風を吹ひつ人哉予といふ
教をいしむる志のれるとは原をも吞こ胃をもあたひ
大言不圖ししるまおぼろふい予斗著の量殊
予遠去り生れ師友子ともかくばけいゆといふ

少のひく古学流をけうして祖翁の一書すくら
まきまけし物をせむてそまきすてくきく
を愛るやも散りよつ消息透汗の志けきまよむし
功も集めて共ひん世の一一し予予ふいそ俳諧一
葉集と題し初このまきとまきとさねとかけ訂
古進予西中と非ゆは見るとわらうく村肝をきさ
みこの功も一舎を道旁予つとれハ三年まきまき
いふ話予いし一とまきと友人坎宮の函底まきまき
金もて心えしとあまのりあのおまきまき大事は

多を費さんよういふは此心境に入らば人の心おぼ
えは人の心法を捨ていふふやうに心をみよ水子
画き水子ちやんと然る所拙を争ひ一生を名利
あやかしそふさけぬふ仇詰を勉て未平仇詰を
くすねさし女のちやね流るるよととそそ弱
乃河をくうしてわきの燈ら手法なり

文政丁亥仲秋

四辭書 湖中

凡例

- 一 表裏の部寛文延寶天和時代の分は四季とて
帖の付しめ玉貞享元福の分は表存しうとて
手紙よりよくて教習季の分は巻末に出す
- 一 同類しき書より尺とる句或は形跡の法或は能友
子傳とて古書と所又ふふ分私を捨てよとて
何れも考證として手季のの末に註
- 一 附合の部は延寶より元禄まじり年歴とて
次中とて廻り一季の流りもてしむ

一同二百三句成、又句七句宛の物、其まき徳の末に載
一同古集六の寛文中、宗房と有り、是等天和の玉に
柳青、或は世道と有り、貞享のうへにハ、物と有り、信と
是より儼し

一文の初石印の頃、不猫地、越人の世あることゆけし
有り、とす、かき、煤掃の設翁の作ある、とす、然し然
おと、の文、其まき、世道と有り、いふ、いふ、み、と、有、は
授多け、は、未、始、と、載

一文、混、合、し、し、ハ、辭、從、純、の、た、ら、い、の、と、に、所、し、は

紀行などの中、在り、粗多、有り、精多、有り、又、執、き
物、も、ま、ま、し、く、記、し、て、人、の、考、を、ま、す

一、遠、流、の、初、祖、翁、の、所、い、も、ま、ま、一、時、の、執、れ、し、と、す、い、は、
後、す、し、く、志、の、い、は、し、と、奉

一同、か、の、書、り、ん、み、し、し、は、ま、ま、と、長、く、ゆ、し、の、を、大
同、小、を、と、私、に、服、き、人、も、け、し、と、あり、重、複、を、し、

載

俳諧一葉集 爰句春々部

古學庵佛号 編
幻窓 湖中
玖窩 久藏 校

寛文延享天和年中

庭訓の性未詳又麻どうりさの巻
昔白字や世に魚 枕書 初のとて
今年も 棚へあけてや若き心
年や人年とてしめていりてさ
齒原の葉もさやまらひの鏡
かひもんとつくさるる

もく木つる是る手玉うら玉
柳 春く大哉春と云

えの意あり

錦を言ひし折浩島原の字枕

李吟勃進中法

和歌の法とあやあとの八年うま

此梅子生み初言と唱り包し

古以の梅や新波の二年 哉

梅うやまらゝおらう不系右郎

志保一まは尻とすりぬまの弱

梅 梅まき若前うれ女うま

杉風言也

さくけらう二月中旬旬と川若子

吉季はとやそとくすき行よ次郎月

紅の妻へついの崩れよかうひら

暮らすく白魚やとく八浦ぬる

石川加解生りの舟舟山店子あはれ

厨へんとし芥の飯やとて津川ま

折原ふこれ青泥切庭の芥うや

千代の供ととやうおむ油

赤もあいの朝浦跡す芥の食

出まらんや墨子芥鏡をんて

さうくぬ梅子すて引風ま

梅吹や向の換木の上ふあ

竹内一枝軒

春の自一梅花一枝のこゝろさきの
河らあはれや面くさくさく柳 数
餅 雪をとりしるふとあややあふ
くふひん善提の鐘を静むる
走る魚子價のりくくくくみあれ
菅指くあふる女操りくすは
内裡解人形天皇の御宇とくわ
右所八作の内ニ
貝よまゝ風のみまきあやあまの浦
姨石くつりくくくくすけ
播けんやまを木枯の枯くくく

山吹のあか葉の香のからら魚あふや

夏方知酒聖を始覺殊神

花ゆくむせ香海走らく食はる

雨降るれハ

雪履の尻おしゆくむ山休く
ふの飛ゆくけくくくく和能月
節を結の月も尺くくく鬼 薊
くち山やお換くくくく志さく
若の先くあはれをくく 横海苔
紅毛く花く来ゆくくくくく
姥極吸やむほのおくくく
糸さくくくくくあつれ

吹風を尾細くあつちや大さくら
艶あり奴を足るや後姿のさくら
まを—そは多くと花の風

初瀬—人しあはるる

—のるる人やさくらさけ山楳

花の事—さび白くあれはうし

あすのぬあけきやあすあす
ま風干吹出しあふあふ
あつち花やあつち三郎のよしの山
てきらうく—あつちあつちあつち
あつちあつちあつち七十五
あつちあつちあつちあつちあつち

先初や直竹う尺八のあつちの空
あつちあつちあつちあつちあつち
氏も—あつちあつちあつちあつち

道亭の村

あつちあつちあつちあつちあつち

李正芭蕉を贈る

あつちあつちあつちあつちあつち

貞享元禄年中

あつちあつちあつちあつちあつち

虎子河

あつちあつちあつちあつちあつち

山家遠志

後塔了留余千 隣おの思のこし
伊勢の志家も来りて子代のま
嵐雪の亭なる正月小袖をまきぬ
夜やうら安き一燈のつとねのたま
ちの符波きしきんと旧友のまうて
酒無しけりえりの昼さしけりけ
おの尺とつし
二りなりとぬらうらきしけり花のま
あうらけりけりけりけりけりけりけり
あうらけりけりけりけりけりけり
あうらけりけりけりけりけりけり

あうらけりけりけりけりけりけり

こゝに遠志しむれ人いさやうあのみ
御殿の雪も危き雪をむらふお三
はやくとすし題曰

大伴結の雪のけしきい何 佛

入と人ぬまや鏡のうらけ梅
雪しけりけりけりけりけりけり
えうらけりけりけりけりけりけり
遠き本なりけりけりけりけりけり
ふらけりけりけりけりけりけり
古畑なりけりけりけりけりけり
一とをけりけりけりけりけり

菊菊千々少々文々の竹の葉如

風麦亭

手さくくわのぬれ此等山これ
天多枯や—此等を引て—くのみ
まふれや名もあぶ山の節露
正月もみ地と近江中関 月
くくひのひさる—くく枯うま
おほちうし
まろ—くく意の竹れさや—は
まや中 稼のう—る数一のあ
くくひすや歸を養する 梅は先
ある人のその戸と君付けのよそよそ

あふ—くくし季え—くくこのひの
ひく—菊まをぬれか—くく垣壁
此梅きう—あ—くくくくくく
あ—くくくくくくかのみこの隙
の梅—くくくく物とや—くく
無—くく—くくくくくく
菊—くく—くく—くく—くく
伊賀のあ—くく
結 鳥 古—くく—くく—くく
訪—くく
梅—くく—くく—くく—くく
寐—くく—くく—くく—くく

紅梅や尺女を急つゝる玉の如くは
梅ありて梅の如くは玉の如くは
山里に万葉を色し梅の如くは
を良し

阿古久らよの心とてしるぐめの志
卓袋亭月待

月やたらや梅のけけゆゑ小山伏
山家

手はうむまきと梅のけけゆゑ外
傍の山家とてしるぐめの志
とてしるぐめの志とてしるぐめの志
本千とあるは思を色ししあき

あきとてしるぐめの志とてしるぐめの志
て日本料と石炭とてしるぐめの志
傍とてしるぐめの志とてしるぐめの志
めつ

あきとてしるぐめの志とてしるぐめの志
一とてあきの如く梅の如くは
とてしるぐめの志とてしるぐめの志
けけとてしるぐめの志とてしるぐめの志
を良し

又とてしるぐめの志とてしるぐめの志
梅の如くは

おととてしるぐめの志とてしるぐめの志
梅の如くは

細代民終々息をなせり

梅の本手もやわらぐ本や梅のせ
里の子よ梅おち跡を牛乃歌

園女亭

暖簾のたぐもゆりし少少梅

乙州より武行饅頭

梅こそはそまきくらのたのまじけ
まじやまききくらのよかぬと梅

かまきまぬかまきくらの梅板

古来より梅の人のまじけ

梅のそまきくらの梅のそまき

梅のそまきくらの梅のそまき

一箇馬の尻より父梅丸を方ヤツ
うーん

梅のそまきくらの梅のそまき

梅のそまきくらの梅のそまき

梅のそまきくらの梅のそまき

梅のそまきくらの梅のそまき

梅のそまきくらの梅のそまき

二月吉より梅のそまき

梅のそまきくらの梅のそまき

梅のそまきくらの梅のそまき

梅のそまき

梅のそまきくらの梅のそまき

真言宗の寺々々々々々の末に伊勢の諸寺
系は白洲の末を流すに及ぶる事あり
及ひ侍らぬに及ぶる事あり
伊勢の寺々々々々々の末に伊勢の諸寺
系は白洲の末を流すに及ぶる事あり
及ひ侍らぬに及ぶる事あり

伊の木は花とて一し一しとて伊の木は
花とて一し一しとて伊の木は

塔山越之節

陽たつた系肩すゝむ川流るる

陽たつた系肩すゝむ川流るる

伊賀野大佛寺

丈六の石の石の上
枯きやまに陽たつたの一二寸

野州堂の八雲の節

多岐の節はつとてつとてつとてつとて
入るる節はつとてつとてつとてつとて
百多の節はつとてつとてつとてつとて
本堂の節はつとてつとてつとてつとて
二月寺

多岐の節はつとてつとてつとてつとて

泊瀬

昔の和や若人ゆきし一筆の陽
昔の和や若人ゆきし一筆の陽

春風

春風や人をくつる三筆の

三筆奉納

三筆やもくぬ窟もまき乃西

ト一筆西行庵二句

凍あけの雪やけり及やう信る如

まき木の木下こつたふ木可有あ

くくも由や若人をも伸す雪の是

春風

北

木性ややう起さぬ一筆の南
まき向や若人ゆきし一筆の南
まき向や若人ゆきし一筆の南

春風

春風や人をくつる三筆の

三筆奉納

三筆やもくぬ窟もまき乃西

凍あけの雪やけり及やう信る如

まき木の木下こつたふ木可有あ

春風

春風や人をくつる三筆の

三筆やもくぬ窟もまき乃西

かゝるまじき相にけりては
まのいふまじき相にけりては
まのいふまじき相にけりては
まのいふまじき相にけりては
まのいふまじき相にけりては

八九月に
壇場
世に
七寺
八寺
檀

山水歌

かゝるまじき相にけりては
まのいふまじき相にけりては
まのいふまじき相にけりては
まのいふまじき相にけりては
まのいふまじき相にけりては

芳也こし 様尺さしつひの本

龍門ニ句

龍門の花や上戸のちきりきん
酒のこすかきむらさきの花
桜 袴きとくわきこよ五里ふり

芳也

花ささく山をり波の朝ほけ
きんくくハ花の上さる有様

尾村

花のけけ 遠くへ 似たる 桜ねえ
大和をとり 柳とて 葛城の 袴とて
よきもの ちきりきん 鳴くハ かなし

花のけけいとも 観あふかの 柳のみさ
ちきりきん 人のけささく 袴とて
花尺さし 花とて 柳の 尺
支考く 東行 柳

此くち 推さよ 柳とて 五里 一具
尾法の 門人より 浪酒一 袴木とて
活系一 袴おとく けさるを 人く

飲あけり 花とて 柳とて 二外 袴
花の 柳ハ 袴とて 柳とて 柳とて
花とて 柳とて 門人 袴とて
花の 柳とて 柳とて 柳とて

示門人

子より飽と申し人千も花やかし

三浦山の雪よし梅雪の画し牙の横

まもちやきくおとろく身の花

信や吟物ある

都の毛はくろふ衣や花の年

お落活そすまうして

西行の流と河くむ花の池

鳥子似ぬ若くもわし神さく

うさくのみよ

うらやううらやうの少花山極

花山

花の山二丁のほれハ大徳園

まゆまの海川の松をきつ

あんなくきす舟をきし柳系

さうくはなをわねをきしあゆ

花ぬきのおはれそらよ

春よりわねをきしあゆみはるの葉

上池のちんすすくはつりに人幕

あさわき物のちんすすくはつりに人幕

ちんすすくはつりに人幕

よりよき花は梅はぬ花久しうらや

古書や花はぬ花の梅はひとを

あゆみくはつりあゆものを横ちる

舞きしつちのまに持ゆふらぬ
山家

智のまをそふ流のかは休らふ外
おりのおちうらう長しそさくら
歌うみの気なきはしり山梅
二尺の岡もあみり

いさよふれ御のそを海のみま
泡子亭

残名のぬらうをそふ雨のち
伊賀ふいた値のたはそのかみそ良の
いそ様の料子附ふれうそ供はれ
一里うらみふそもふらわ

扇うきほくわうけやあさう
似合しや豆のねめう様う
い原寺層木子亭

おまの松花や木原お屋造了
木のまにけしと餘り休らふ
酒屋寺に

いすうり花吹入さう修のゆ
はるみちみちけふはむく時
子枕さうりおあふらうそ味
あ手む替

春しやさうしそを魁すあの花
花のうけ祝ふかえり丸うらう

上磯磯

海よりよりの小島ありてむ山嶺

古郷のありてみづ國中の三島の嶺を

と云ふ

まき木や二葉草やもえり花の嶺

けしきも思ひこまき木も花の嶺

半嶺や花の嶺のうらやまの嶺

木白無り

依負西岸寺

系あり依負の柳の葉をよ

吹くは嶺のうらやまの柳のうら

尚白と浪善の下

只一夜柳の葉をよ木幡のれ

古寺の柳の葉をよ木幡のれ

舟ありまき木も花の嶺の柳

まき木も花の嶺の柳の葉をよ

まき木も花の嶺の柳の葉をよ

まき木も花の嶺の柳の葉をよ

まき木も花の嶺の柳の葉をよ

重三

青柳の葉をよ木幡のれ

おとろくち馬子あてし海苔の所
光嶋

蟬よりハ海苔をハ志のまゝにせし
海苔子里の海苔

海苔汁の子除足まゝハ海苔梳
あけりや白魚走らふ一寸

岸陸下向平にはなをもつ送りの人
ゆゆのまは白魚送りのわづれ

坂子園渡

まゝもや思ふ目をあくはの網

よー野をてし海

飯貝や海子海へて回しめ

古代や陸海こむまはけき

陸をそ同しし船をなやきり
ゆゆのまは白魚送りのわづれ

田家

麦丸しややつし是を猫の素

猫の志中をよ園のおちる月

膳所ゆゆの人平射し

猫のまづしはるしはるしはるし

山後まゝはやゆゆしはるしはるし

悼呂丸

當由ゆゆしはるしはるしはるし

よくとら統ハ昔もむゆかきゆゆ

圓角廟の漢を以てする

お翠とすこしお翠の子にめわひのれ

世音提山

山寺の山——さきよ地志いけり

於この千利の播種や山屏き

榮店二句

清——いけり世さけり千體さく女

葉とくけり世さけり世さけり世さけり

陳菴の信宗波旅を起れりをも

古葉只あそれり——と隣りふ

京中や物もつらき事や世

あつてもつらき事や世あつてもつらき事

を存し——しきけりけり

ひそく——中の物もわき——の事

き神とし

父母の志きりり世——種々の事

地——きけりけりしき——の事

種々の事——たかき——世

夜子とあつてもつらき事や世

葉子画賛

もろこ——の世にけりけりけり

物もや白いぬ事や世

下木亭

世の物もつらき事や世あつてもつらき事

起よしし糸友より家めりぬ様

画譜

裾山や如くはけみはし

西河

あらしの山あふあふ流の如く

画譜

山吹や字治の楕圓のゆほすくお

山あふやまのき枝の取

大和り御の肘丹波市とやいふ

あふらしのたれみささの光

あふくはれはれ

雪外こころのこころや春の日記

雪のふりしや四合さくく 残る履

峰入や一里おくるし小山 依

此節のたれし茅舎の画鏡

雪とくはるやまや破つ花家

二葉軒

女教 精門を雪のこころとくぬ

遷就尚舎

物のあはれをえとふ秋のわの葉は

ゆくまにやあふの浦に追付ら

るふ

行春やまの雪の急の目る海

田家子まの雪を依

入おほき 寝るまきうしんまのらね
寝つゝぬ里そ 何さのそくらのそ
聖湖水傍ま
ゆくまををほの人まきなる

春神

あら通く 陳の梅をあらゆく

自画自賛

あら方うう 成やとくしんまのま
えらやねま ことしんまのま 秋のま
四方うう 春のま ことしんまのま
春のま ことしんまのま 春のま
止如の舞
春のま ことしんまのま 春のま
孤石のま ことしんまのま
おく起り 春のま ことしんまのま
聖水和尚の舞
春のま ことしんまのま 春のま
春のま ことしんまのま 春のま
春のま ことしんまのま 春のま

梅歌

雪降りて山は白くしそあけは春

怒籠り雲もひらきけりそ心静か

はらりけり

雪も降らねば春の来りぬ

雪の降らぬや春の来りぬ

を言ふ

雪も降らねば春の来りぬ

菖蒲歌

寛文延宝の御年中

菖蒲の花は毎年あらず

好くあらずとも春は来りぬ

日はあまの空に照らす

戸のけしきもあらず

黒枝をさしては春は来りぬ

志はあらずとも春は来りぬ

子規の声もあらず

清くあらずとも春は来りぬ

花はあらずとも春は来りぬ

芳草生ずるは春の来りぬ

彌生

夏一くく荆をつつむほろろ
葛子多糸似くくや似くくまの
時きつさく御沙多ふあうれ
五月のあき袴紫の翠つさきそ
さみられんし物をや有の魚
海もや身くすくある梅の雨
五月向も遊きのみあみあれ川
さみられや露燈あける高右郎
さみれし物やさく呈本をくけくも件
くも三河あくくくまのあつさ
樓の涼や花さくく城の女控 海
名水八体の内二白

秋やほろろ水や秋くくまの和
汗あやうく物ゆりの及山伏
夕のほろろ尺とくくやあつさくく
ゆり糸の白く柳のほろろ秋智くく
松風生るる石くくきくくくくく
野くくく
いとやあふふ布えくく蟬一衣
雪の河極片膝あき月か
夏きききひめゆりや后さく
宿押よらくあはくくあき
閑松下くく玉玉素
楮くくくくくくくく

小坂の中山

いづらふくし川うまの下の下すし

不卜の母道善

あむけく治るひましくそめり寺

甲斐文の初内とあふふりふつ道中

孫若吟

えりふくし我を治り又くくふ外

貞享文緒手中

ひら川後くくしふふあぬ更え

えふ本くもひひひひひひひひひひ

を良くし

浄佛のたふしせんめふ麻ふのり

滑仏や歌ふ念ふ珠数めり

招提寺

まの葉くくし月の子めくくや

日光山

あふふふふふふふふふふのり

きふ尺の儲

まけくくし海くくし花くくしあはめ

あふひあふく木さや日月のたふく

甲斐入山中

山麓の願 牙はるうま

あふあふあふあふあふあふあふ

青作一や字解の種も出つて

通業門

五月十日武蔵守とある所は
入く川崎をい送る事なる物おの
白きふ草

麦の穂もこころにつくも
麦の穂もこころにつくも

悼大巖和尚

梅意こおのふおむあみく
廿角の母五七の追慕
卯の香くさくさおむあみく

うのちやうふ梅のけうひ

尾張く東武下下

牡丹花清くくけ

祝陳新也自画自賛

空うぬあやほめへの花の蜜

大坂

墓より糸のこころ

山崎宗鑑

海をたぬかま

のちのち

うらなふ

鳥海

うまつゝ我千歳のわが心
帰奉

る名いふて風をこく
これとわさるふりさけ
大道の跡を尋 日光御代系勅
ふふ千慮従ふる宮田や何葉
藤のふ枝をのけし
嵐のふ枝をのけし

波塵

はたさる千歳
雲片も
木つきたるは破るは木を

幻信院

先ふのむ枝の木を
別旧友

二やうこ千歳
子規 柳 柳 柳
柳 や 柳 柳 柳

珠堂り峰

はたの海すの矢先
はたの海すの矢先
素尺の鏡

みちるく一尺の素門
みちるく一尺の素門

おとろしきもあつては後叙生石尺
おとろしきおゆる厚くうらなうおとろし
先づおゆるとておゆるは

首末もや字久大たおゆるとて
那次おゆる

おゆる積りるおゆるおけよ郭一
おゆるおゆる積りるおゆるおけよ上
一おゆるの江戸積りるおゆる杜字
おゆるおゆるおゆるおゆるおゆる
おゆるおゆる

おゆるおゆる大竹敷もゆるおゆる
おゆるおゆる一おゆるおゆるおゆる

さし一筆書ける編年

おゆるおゆる一筆書ける編年

おゆるおゆる

おゆるおゆる中一も市の時

おゆるおゆるおゆるおゆる一杜字

不卜一周忌翠風無行

おゆるおゆるおゆるおゆる一杜字

おゆるおゆるおゆるおゆる一杜字

おゆるおゆるおゆるおゆる一杜字

おゆるおゆるおゆるおゆる一杜字

おゆるおゆるおゆる

おゆるおゆるおゆるおゆる一杜字

菅原舎

柳のやうに青を去るの如料理の百

そまきやすうひ

とんちんちん 標や雨の花も至

白けーや対向方赤の咲つたお

踏杜園

白きーに胸もく標かのくみ外

次鹿

海方の島まのえーやけーの赤

感水亭

雨のし思ふーもふ子苗外

芦野

河一板植さたらさ 柳うれ

奥州合の志し川よ玉

あつひー、まのさ苗も思のち

早苗も赤もさふら敷うも

みらねよのなをーの思のし先園を

の能まのーまきまにさそよふて合

は白川もこぬねさ岩標取よむる信

學齋等好子の芳名を柳の陽園は

かゝ故人の遺書

風はのこーめやれくの田植吾

志のふの歌思ふの思のや又さ柳のそ花

とこ方ニちんちんさるる此石に昔女の

鳥の石に生るる面は又雪の如く
雪すうみしるしるしるしるしるしる
よやく今ハ昔より切れ石の面は
朱くかきたる風情も又しるしるしる
うき昔より切れしるしるしるしる

さあしるしるしるしるしるしるしる
尾張の旧文の如し

世を知らず代々しるしるしるしる
荒田の事

柴つけしるしるしるしるしるしる
雀んまはしるしるしるしるしるしる
そのの如きとさるしるしるしるしる

本言録の松島のまう大けしるしるしる
瀬田の事とさるしるしるしる

はしるしるしるしるしるしるしる
上林三人亭

管尺や梅郎酔いさるしるしる
秋の如きとさるしるしるしるしる

あわやちの如きとさるしるしるしる
ましるしるしるしるしるしるしる
るしるしるしるしるしるしるしる
わらひやるしるしるしるしるしる
あしるしるしるしるしるしるしる

昭牛角うろこけを落し

浮らう本居流す赴く時

うふ人のあつてもあつて本居の境
粒のあつてもあつても本居の粒

屈家の山家

登まらみてるの影

清風亭

とらぬあつたのあつたのあつたのあつた

牛のまや粒ふあつた粒のまや

小笠原

うふやあつたあつたあつたあつた

甲の山粒あつたあつたあつたあつた

まのやあつたあつたあつたあつた

本園亭

あつたあつたあつたあつたあつた

坊

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

大津

此言をん説くしぬ處ころち

武隈川とよまのり作合ましそ送るし

ゆる遠土の河も津よりかゝるあり

よ諸事し人のしとや飯谷傳

武隈のねし

橋よりねを二本を三月越

みしるおや縁後の鈴お耳よつく

俗事し言ふとれこ五月四日吉家

求るもて尺の五日とやねしとみ

花のやめ一巻を橋し遊る所

のうら

所や矢子足し結ぶ最子籠の結

ちまふ結片よりとるまふ能

病中自叙

髪生く窓新着し五月雨

きみしれからぬぬものや懐るの橋

武隈川の水清し

五月雨を流陣ねむるを

醫王寺より

及く左刀も五月雨かき行紙帳

夜中おこしつゝのこはせし一里

とくしとる鳥とらふちやけしと

きみしれ海つきとみちもつし

きんたつとるてとるてぬ

五月三日 河に五月のめりくは
中流のこし

五月三日の降 脚 一わ光を
もみ川 言

五月三日の降 脚 一わ光を
風のまもとぬらち 一もみ川
りのそやあゆみさ 五月の
信徳の流る

五月三日の降 脚 一わ光を
五福の流る 一わ光を
五月三日の降 脚 一わ光を

五月三日の降 脚 一わ光を
五月三日の降 脚 一わ光を
五月三日の降 脚 一わ光を

おぬ川くち作す

五月三日の降 脚 一わ光を
五月三日の降 脚 一わ光を
五月三日の降 脚 一わ光を

五月三日の降 脚 一わ光を
五月三日の降 脚 一わ光を
五月三日の降 脚 一わ光を

五月三日の降 脚 一わ光を
五月三日の降 脚 一わ光を
五月三日の降 脚 一わ光を

五月三日の降 脚 一わ光を
五月三日の降 脚 一わ光を
五月三日の降 脚 一わ光を

ふらや枚子夕夕好一里 行
夏山や残すく里を食時分
窓陽也や時子時おす御美
子珊亭
窓陽也や暮を小庵のふきま
重行亭

路く—や山を歩相のそら 旅子
舟の位ま牛何—大垣の旅店を訪
見けり—只かの暮去らみさのふ
きん花を窓紙のむ—よ白ひ
君の身ハ化結—をぬわの何
正成之像

鐵肝石心此人之情

多—古子うらな 浜や楠の家
破る扇ん掛子 望る石女 上
子館
夏山やつるものとも 岩の法
穀生石
石の意や夏子春く 窓が美し
春海や夏ものわのむね 舟くら
清風亭
け末え 清帆 くれ心 紅のせ
宿歸を伴—て 紅のたれ
己百亭

やうしむ心蕨の枝もあつらふ
首杯のゆれおのまをうらまひ
しむと悔みそ

もろき人なりたふくむあなまは
種ゆふ人も志をくはる路を
くきあをささひしむさふらんことを
旅のしのびし我をまかりし
輪の山を

持経のひくやうしむのあ
ま石寺
志のつらむも志し入をみのあ
やうしむ

やうしむあなま きはえしむのあ

あなまのあなまのあ
あなまのあなまのあ
あなまのあなまのあ
あなまのあなまのあ

あなまのあなまのあ
あなまのあなまのあ

あなまのあなまのあ
あなまのあなまのあ
あなまのあなまのあ
あなまのあなまのあ

瓜の皮を酸く瓜の皮を煮る瓜の皮
瓜の皮を干し瓜の皮を煮る瓜の皮
瓜の皮を煮る瓜の皮を煮る瓜の皮
瓜の皮を煮る瓜の皮を煮る瓜の皮

瓜の皮を煮る瓜の皮を煮る瓜の皮
瓜の皮を煮る瓜の皮を煮る瓜の皮
瓜の皮を煮る瓜の皮を煮る瓜の皮
瓜の皮を煮る瓜の皮を煮る瓜の皮
瓜の皮を煮る瓜の皮を煮る瓜の皮

瓜の皮を煮る瓜の皮を煮る瓜の皮
瓜の皮を煮る瓜の皮を煮る瓜の皮
瓜の皮を煮る瓜の皮を煮る瓜の皮
瓜の皮を煮る瓜の皮を煮る瓜の皮
瓜の皮を煮る瓜の皮を煮る瓜の皮

友の夜や崩れてゆく冷し物
きしは端足とひの海に清き如

岐阜山より

珠沼や古井の清き水可なり

船次の温泉の神古殿に八幡様

遷すまうて古神一方にありま

湯を流すちのく同し石清き

弦うつさや歯牙のくきく山に

次広二首

月を足すや物さくはくはたのる

月を足すや物さくはくはたのる

明石和伯

情意やさくさくふらふら月の

まを歩ハ舞子ぬまきく月

まの夜やこころのゆるらむ

まの月法師ゆきく森坂や

晋の洞明をうらやむ

夏あつに昼や宵の曇りたのむら

秋物さく人の住まうて野を

山も花もさくさく入るやる

井野水楼

寺のまや海ありさくさく浪の上

名号しあつる鶴飼にりよのそと

侍人さくさくさくさくはれに

人しほ山の本けし席をばけ
ををりけし

又たふいあつし其川の幸魚 給

くわいし思ひはるる物し

かきしるしちしき船舟に

かきまふしきすきしけ したる

家名を梅しきニ

ひししとゆく扇や雪の峰

葉のまき目をうまふわ面の鼻

枝あけてきしうしき葉のし

きのししし月ぬれし月の山

ふ月わきしきなくしし

よき内や簡のけしも 鯨

清瀬や浪りあらしむき 松葉

みふ内さし病やみのきし

かきしけぬはるしぬし枝下

松風の茂葉のあはきすし

石川丈山の像

風うけし物けししきし

きし

并きしはふしかみし物けし

小倉山亭寂ちし

松枝をしめてわ風のきし

遊力亭ニ

きゑみや風のまわりはあぢ子
湖や川のさきも情もささの峰
塔は口走矢り居る暑うる
破屋の千の朝や霜の夕すみ
風瀑跡ふ

わすれすふおねの中しんす先
まきあきさうくもあけみの糸
よりさ末の方下つり行く
ふや人の小袖もいづやち月干
十八楼は

はゆしり月を尺ゆゑあぢ涼し
清風亭

涼しさをあやみにしてあぢし
四神もあのをうやみのまもみ

羽黒山

まあしやもろも葉うる南谷
すしとや海の子の月は羽黒山
文鏡子か山の像も影うける

新井谷

あのかくお宝もる柳
袖の海の眺望

あつみ山や吹海うけるみす
寺名目今亭

実ふりき海平入らうもみり川
象清や西施の影ふの花
以趣や朝短めれて海深し

ぬり法沙

きさうらひおとせしは海平うらわれて
花の上こくもみり川
もみり川満寺のまきく干渉りて
法沙もひきまきくをくれは海深し
又晴や休らう干渉お波の花
小瀬さしや柳さしや海士の軒
川中み根木さしやらぬさしやみり

四原の河原網原とくくは月夜の花より
まのこころさしや川中み根木さしや
夜中さしや海のみ物さしや女は帯は
結めしや男は袖折長くは
しは法沙老人もさしや梅原
活原のさしやこころいふは海平
川風や暮らぬは海平のさしや
妙翠亭題田家納涼
飯所さくかきしは老やみさしや
きさく亭
清さしや直さしや妙松の枝り

野水新巻

岸一さき折國之見ゆる位ひの菊

東武より上りて人し子討

赤坂の毛勝さつりし床をみ

破明亭

清しき波流り空しき峰崎の竹

高きとてしほせ思ふ上は鯨の筋

大津木節亭より

秋らちやう海のうらや田草守

音響

笠原傳出換

みえらやれ如きしのけとまに

長真亭

海らく澄るひ元津のち五月のぬ

松島

多しやちこりくさやう文の海

松しややちをも衣巻のちと月

野眺亭

清流のちとみよをこ心た

叢心の軒

あはち終ち里一海の秋浪緑花

松虫横柄をゆきゆきとふるはるのまきや
ちとゆきゆきのつらき

きみしれり空のちとありてはるのまき
ききくゆきゆきとふるはるのまき

赤人三信州よりのゆきゆきとふる

ゆきゆきとふるはるのまきゆきゆきとふる

実のまき

汗のまきゆきゆきとふるはるのまき

昔句秋之類

寛文延寶天和年中

張ぬふの猫をたふしゆくはるの秋

秋未きくも耳をきくはるの秋

秋未ぬも葉をきくはるの秋

名もゆきのまきのまきのまきのまき

月弓や塔の一葉男七夕

七夕はあふぬくはるのまき

名所八体の均二百

星舎の中や路をゆくはるのまき

八節やまきのまきとふるはるのまき

懐社

秋風も吹ききり秋影するは後、
 三日月や新の月の夕法師の如く
 月もさびしき女をわの柳をよそひ
 三日月や新の月の夕法師の如く
 三日月や新の月の夕法師の如く

後了す九月後の中、奈良屋をよそ
 元後をハ、後終ハ、足連ハ、は、は、の秋
 六ヶ所を、病の二人、色無度をも、行れ
 古郷、安原をよそ

月、千里、庵、川、林、山、や、秋、は、は、は、
 角、舞、や、た、く、を、出、廻、の、す、ま、い、取
 画、契

秋、中、や、千、夜、は、は、は、は、破、ぬ、
 秋、何、と、も、を、何、と、も、中、秋、の、風
 於、中、吟

秋、中、れ、や、あ、方、え、は、は、は、は、は、は、
 有、り、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、
 月、了、す、は、は、は、は、は、は、は、は、
 桂、男、す、は、は、は、は、は、は、は、は、
 廿、二、日、も、は、は、は、は、は、は、は、
 新、八、天、の、下、は、は、は、は、は、は、
 夜、中、月、下、は、は、は、は、は、は、
 色、つ、く、は、は、は、は、は、は、は、は、

秋のきりぎりすのやうに戸のきりぎりすのやうに
くげもあつた水生木やもみから耐
式花や茶対仁やもみえと一政以古
歎えとすさゆり

名月のあつたや五十一ヶ條
寺くくと名月の秋や原向山
流るや江戸をえおれふ山の月
木も伐つとも口尺とやうの月
有 蘭 草 菊 宣 止
減まや肩より袖かうう衣
式花や一寸はくれ花のきり
萩のあつたや秋風の口く

又きりぎりすのやうに火中
後泉の秋物のやうなをともあつ
きの船もきりぎりすの秋のうれ
あの日や春の秋を堺町

茅舎の感

芒草のやうにきりぎりすのやうに
とくきりぎりすのやうにきりぎりすのやうに
ひれううと北風もきりぎりすのやうに
秋のうれ男ははなぬものあつた
花本様 裸きりぎりすのやうに

唐黍や軒湯の秋の取らる
重陽

さうつやおらゆく菊や朽本を
世に流を通う竹の秋の取らる
くし取らるるのくしよのきぬ
行く

剥きくろふらん碓のひきまうぬ

貞享元録年中

写海船室

幼秋や海も青田の一みとる

くつ秋やほみまうは坂帳の續

直に侍る

又月やふりも寺の秋やほみ

出雲崎

葛海や佐渡子秋よふり月の川
谷歌の本は葉くしよのきぬ

赤書母七十あるとての秋七月
七月のくしよのきぬ

題とくはくつとてのくしよのきぬ
くしよのきぬ又七世の秋

七株の秋よまかや星の秋
何うの海代も随うくはく

く人々

七夕やささるゝ祝は係施

吊雨星

言 妙一 屏一 下 祐南や若の上

時幸亭より

七夕や秋もささるゝあめのか

富麻寺より

信 妙一 不いゝ死とくゝ信り松

妙一 何のいれりゝ下ゆゝ坂の路り

鼠雪の道平鏡をみり行

妙一 何のいれりゝ下ゆゝ坂の路り

更科の寺より

暮き海より 如はりゝ

閉関

妙一 何のいれりゝ下ゆゝ坂の路り

妙一 何のいれりゝ下ゆゝ坂の路り

和女角巻巻句

妙一 何のいれりゝ下ゆゝ坂の路り

妙一 何のいれりゝ下ゆゝ坂の路り

平一 何のいれりゝ下ゆゝ坂の路り

妙一 何のいれりゝ下ゆゝ坂の路り

妙一 何のいれりゝ下ゆゝ坂の路り

秋 涼しき身やむけや瓜蒞子

桑海の流るゝ御星の心

山也(と)驚きとふかきく空の如
雲の如し

稲妻をくまひくくかみの如く
言敷也

あけをく稲妻をかくにけり
成智識の如くまひくくかみの如く

とつやいひまひくく
やれつとくく懐くぬ人のたやま
稲妻や言のすゆくまひの如
あつたまひくくかみの如く

はれつとくく懐くぬ人のたやま
稲妻や言のすゆくまひの如
あつたまひくくかみの如く

あつたまひくくかみの如く
画譜

あつたまひくくかみの如く
画譜

あつたまひくくかみの如く
画譜

あつたまひくくかみの如く
画譜

藐姑射
バク ミヤク コ ミヤ
ベウ ミヤク コ ミヤ
ミヤク コ ミヤ

崑崙崑崙をく可蓬萊方丈八仙の代より
 末のゆくり士峰代を掛て蒼天をお
 きえ日月もろく重門をひらく可とむ
 うふふこれおもしうて美奈もあす
 詩人句を過ぎます才士文人もさそ所
 画工も筆を捨てけり中 藐姑射
 孔巧の神人ゆつて其詩をよくさむ
 手画をよくさむ

空を渡る時 百鳥を中絶し
 霧がみお下二を足ぬるおろし
 秋海棠 西瓜の心ろりす
 玉川のよみすおん色そをさす

ひよりくくとあはれあけや女郎を

くすし何りの像

むくもを少中よりわふく葉の根

可上の吟

是くさお木移るるす喰れら

言田醫師細川青虎傳

葉樹しつはのをもさす 枕

加賀屋入り入

ふ編のまやそけ入有るる後海

山社しよもさす

志厚しき名やおねい早林のさ

秋多や一夜そやとや山の犬

観水亭

ぬれくゆく人のあししやあのか

狩り

浪のすや小貝子やうさるる花のさか

いろり

小枝ちきまうけの小ういささき

画襖

まうあまこもむね花のうねり

ひとあまう遊女とあまう花と月

扇書言白子の花あうけをけり

尺く

ゆわらわきとらうけ花のさか

敷智寺茶院

門より入ハ籠籠手はまは白ひし

悦事お高のほろりやうけ

まをけりまき花はまはやうけ

茶店

茶のまや花のつるさにはあまの

遊女の画襖

枝よりけりうけうけうけまは

きりあのかをまき花のうけうけ

まうけうけうけうけうけうけ

け寺をけ一とひのうけうけ

秋草茶

是はそし角力西子の花乃家
侍娘は身従ふ山姥を討まて

若くはハまこいけりもて多し山姥は
三日月の代をねほりし若くはあふ志

知良の才をそと新老をかくす
よふあわや在りしこふ背戸の栗

袖秋中の一日はあつてて喜歌の題を白
きうはや秋をいふしは狐う南

かかふ玉をこころ
熊坂の地ううや川の水玉あう

玉あううふく横塔のくさうり
る山

元喜貞のあまううううう

若くはぬ身とれねはひそ玉あう
美作やをうて世をう玉まう

甲戌の秋大御子作りしをこのうみは
許す清息をいれはるは四里のうみは

命をいふあまう
家をうれ枝を白髪をう

後骨の額
夕風や雪掛打もぬく多は

切しきけ縁父屋さくすうい取
許す画平

晴角力川と上り平米の食

夜よりけんとし句を著せしる
子の繪子

秋のいろぬの味舌盡くあつくらう
志何うや結くつる聲あまうし
まよこ言 宵やみとくし 虫のあや
床にまよくいひま工入やきうし
新ぬし子習すむきまうし
右側の神社

おさんやぬかすのふのきうし
白梨ぬく秋の口やきうし
きひーさや野うけくさ
その戸をうに住るひの秋の風は

けあつたくれ友とらの方つらう

みの法は音をこゆうまよまは
晴吟や取つあうし
故地まあうし 秋あま法外
えの名はるし

田中のは花きうし

新法や不編うし
田家

かろけけー田向の都や里の秋
板の窓ちる標あゆみや新し

田最酒家

桐の本子 野守りあう 埴の内

庭の目もやや昔の如く
 稲すゝも昔の木もけや
 青くてももふも色も
 かくさぬそや昔の汁も
 大風おあしそも昔の
 木曾塚の旧草も在る
 字の戸もきれや昔の
 松陰軒も
 古柳もやそも昔の
 全昌も
 庭掃りもや昔の
 画賛

龍波や原の末の時も
 望田も
 病もや昔のや昔の
 海寺のや昔の
 月もや昔のや昔の
 奈良も
 山もや昔のや昔の
 竹もや昔のや昔の
 松もや昔のや昔の
 故人も

冬瓜や五子かぐる魚の形
あり答

茅屋の女西行あしつ八景より
山中十景野高嶽過火

かき火子魚や浪のいぢき山
鼠をの四角子渡り村

旅鳥二百十日の船支度
あのをとくとも千吹きのうらふ

吹や飛ぶらんを法百の暴風
之の力やとわらふるしづか

小坂の中山
言ふにわらうとあま月をきく一葉の松

非流山

三十一の月あしつとまきの松を抱
又の朝やまの片形もさる有松

やあしつ人を休る月尺うら
いさしつあしつ船を船を舟の中

一松をわらうとあま月をきく一葉の松
をきくしつ

卯のくち二十七日の松を三つは月
川舟やよの松よい酒能舟有松

吉將の古家をもつて
月やその跡の木はぬるしつ

高島根本寺より

月々や一柳を南を持たす

寺より南をまさり鳥を内尺可

田力あり

跡の子や稲よりうけそ月を尺

いよの葉や月の中里は鏡 島

大層根成院より

何事一は尺をまさり鳥を内尺可

あは中一は舞をまさり鳥を内尺可

姨控より

俣や姨ひより月を尺

いよの葉や月の中里は鏡 島

善光寺より

月うけや河川河原も品山

仲秋の月を更科の里姨控より

ういよの葉や月の中里は鏡 島

あは中一は舞をまさり鳥を内尺可

木更科の月を更科の里姨控より

いよの葉や月の中里は鏡 島

あは中一は舞をまさり鳥を内尺可

いよの葉や月の中里は鏡 島

あは中一は舞をまさり鳥を内尺可

いよの葉や月の中里は鏡 島

いよの葉や月の中里は鏡 島

月と名をつてみるゆゑやいよの神
蛇山

義仲の山崩れの山は月出
香炉の神

月清し遊女のまをり砂の上
敦賀花油

月乃わかふりおさるめおふ
候

月のみる高き角力もあつて
仲秋の夜つとて月海にぬるる物
さくさくは海に清の沈みし竹の枝
西のちの月をいへる歌をもよほし就

歌下き月子歌を引揚ふはなつとて
ゆき

月川の産をさしめ海の色
本因寺

月れおや月と菊とて田之反
斜岩寺

月をひけはあま山所伊吹とて花
すもようは月ももよほしは孤山
の地所

月まに月もたのまし候は山
伊吹又云くおやとてあつれつとて
そまの男の月をいへる物海すまの

尺一の燈の影をさくし付くぬかの向
ちの妻影を切る一帯をさくけし
心ちの命更へし

月さひよのちり葉に影をさぬ
悼を流て空は静

其靈を羽尾子之をけの月
片月をぬくくくくもぬの月

通題

友うけそぬ月影を深みぬ
お山の頂より

月さひよのちり葉に影をさぬ
既中賦二首

預めく月さへ入る浮佛堂
安くとわきういさよふ月のち

正徳寺納骨

月代や膝よりまると玉首のや

古寺殿月

月尺さるゆきや雪き鳥をさし

月見の物

米くく友をこぶひれ力の宗

義仲寺より

三好ち好門たむ夏やうふの月
名月やゆきあやうふ七小町
名月や史をさくぬきゆの標

名月や朝霞をさき干濱
名月や雲を筆架のけぢりし
名月やこゝろの家を庭の川流坊
消息

あやうしあてた柳をさきの月
紫のしほりまけのや おもひあはれとも
吾子らのまき物うそまをさき
赤山平住の侍をさき西の上人此
ふんやまのふん山をさき
あやうしあてた柳をさきの月
紫のしほりまけのや おもひあはれとも
吾子らのまき物うそまをさき
赤山平住の侍をさき西の上人此
ふんやまのふん山をさき

案の戸は月やさきあやうしあてた

石山平住の侍

橋柳はさきの月おもしろ

松島屋の長女

うづのほの起ても月お七つ

深川

名月や川をさきあやうしあてた

柱は松風を揺る情を割る位は
曾良成水の物語をさき
月のよさをほのめさき

ときを流すをさきあやうしあてた

深川の末まおら

川とて此川にや月夜の友
いさうひそく川つら園のそめり

嵐蘭初七日消暮

足しやそちりく言の三りの月

東照傳

入月の跡をれの日陽うき

感水亭うき

新待や菊の委仕する巨府津

伊賀の山中うき

名月の花うき下し下線うき

名月の林の妻や田の墨

義忠危うき

くも月夜よし燈の月の十六里

任吉の市うき

非實く分家多る月尺うき

畦止亭題月下送映

月さむや狐怖うき火の煙

甘柿亭うき

秋もろわえつらあき月夜の歌

名月や池をめぐらさねてうき

山守かめ庭やあめの月

わのわらわは角気氣をか魚の月

かけそや先母のいら物うき

棧や心のうきをうきむきうき

芳野松論

礎亦くく高きゆめをうや坊りつ月
高しゆさう山斗きりく礎うれ
積ひふハ積れ小袖をきめこけ
子里う旧里し

孫うや習是う慰む所のたぐ
庭牧亭し

書植く休回玉木のあーい
神の宮のまはるききもあつらう
昔の植まらやうしめたる歌集外
鬼神ハ家もあもかともあみちか
よー神え

海原寺を誦るまのふい何をも思ふ事
母の白髪をくわのみき

まゝとくハ消ん流るゆりお秋の雲
初葺やまきり秋のつゆ
松くけやーぬ木葉の風をく付
松葺やかたれとんハ松の歌
葺初やあふふいりく又時向
塔水ふ登

高し居る木の葉その家捨りや
木ろの操るき妻の人けち産うれ
李内古木の二人子
昔菊と柳とくれ 昔子の院

尺野守翠亭

里よりと枝の木枝ぬかきもや
まふ柿や一口ハ喰ふ猿のつゝ

望田素微可休亭

祖父と親を子け屋や枝みん
橙や侍整お白子の店きし
何喰く小家ハ秋の柳 一かけ
杖を孫字膝くふ矢くわ菊の香

草葎の両

起ゆうゝと菊ののうしあはれや

左極亭よし

えやくきりぬまらう一右の菊

蓬にぬまらう菊をわすまきの六
龍山の雲をひらきりやを海は
鶴ねををすあく相竹なをくれ
とまじう 柳やふぬ幸逢らすわ
あゝ年あゝと哉

つとよひのしり枝のくぬを枝の菊

山中の浪名よし

山中わさきをたきしぬ 陽の自心

如行亭よし

渡みよのしりきふら菊のつちみん
若草のたかたきしりくハぬのこ
田舎子食す

縮こぶの焼もめししし菊のくふ

望田の何しし木匠醫師の兄の亭に招

れしにしろうろをたし酒をこめし

あられろり地業八咫の井茶末をりす

いし芥しりはが

城も末く破もしぬ菊の餘ら菊

九月のなご州二村を携り末くれハ

そのの戸やりのそろくろはし菊の酒

尺のみの所れやのろくおの後の茶

八丁堀ろりし

菊のちんや石屋の石の百

大門通をこころよ

園女亭ろり

ろりきくお月をまてえしお茶をあし

孝良しし二百

菊のちんやちんやろりちんや佛を

まてえしお月をまてえしお茶をあし

ろりきくお月をまてえしお茶をあし

生玉をまてえしお月をまてえしお茶をあし

菊のちんやちんやろりちんや佛を

まてえしお月をまてえしお茶をあし

以上の破局をわくわくする

秋十とを却ては秋をさす古の

懐抄子

秋の風は人懐きあり秋の風は

義節のうららみ似たり秋の風

秋風や藪もささげも不破の耳

あり志みく大根ありし秋の風

一筆追善

境よりさけ香江あり秋の風

道中

春はとりとつれも秋の風

牛秋屋より故のあり秋の風

秋舎観音寺

石山のふりくちり秋の風

贈柳矢号

柳の木はさき葉もあはれ秋の風

中村をさす

秋の伴侍あはさき京の秋

疎らさの吹もも喜も栗の球

中村の歌

ものりく唇ささり秋の風

昔秋の葉もきき

秋風や柳子くささき草のち

伊勢紀行の跋

西 東 あまのれさねのし 秋の風

悼松倉翁業

秋の風を折る如く 一き葉の枝

野水の旅行を送る

尺送るれくくくやきひし 秋の風

物置亭題秋室

乳麴のふり 焚きたる秋室のまゆ

麻呂神前

此 ねの宿 生を代や神の秋

留る

あつとくおろくく果の木るの秋

さしきく秋よ秋ちねひしり 隆
種のはるき

さひしとやほたる膝の涼の秋
外伝菴

松 痛や宿屋のつらふ 秋の山
小松木浮桐実無り

秋の風を折るゆのくや事る小松川
松林

此 秋の風を折るきくく ちりり ちりり
車宿亭 二句

秋の風を折るきくく ちりり ちりり
あまのれさねのし ちりり ちりり

きしきし人し青木箱のや〜朝起
せは〜

柿も〜らふ秋のおや梅や亭も〜
木園亭より

死のきぬぬ松之箱の〜秋の〜れ
い〜秋はせき〜て 闘進子よかれ〜

深川の危
袴の節の履を〜き〜し秋の〜程

枯枝〜鴨の〜き〜し秋の〜れ
雲竹の像

〜し〜しけきも〜き〜し秋の〜程
所思

此花やゆ〜入〜し秋の〜程
り秋やふ〜し〜し秋の〜程
捨け〜し〜し秋の〜程
内書〜し〜し秋の〜程
を〜し〜し

石〜し〜し秋の〜程
ゆく秋の〜し〜し秋の〜程
せき柏亭より

秋は〜し〜し秋の〜程
遠〜し〜し秋の〜程

秋の〜し〜し秋の〜程
行秋や〜し〜し秋の〜程

考證

悼仙風

子向く一竿ハ草子一仙一と云
 暮海長光系その名一と云
 竹も草子
 阿ふりも草子の草子一と云
 武義地の方の居生や松島の鐘
 又うらむらふ草子の一と云
 よし一と云

現況小部をいかに一と云

一草菴の席上總食意を好一と云

一と云

張の終

米のふふ射を紙子をもふと云

みのまはし一と云

等我一と云

名力一と云

今一と云

世の中一と云

鮭一と云

竹の神一と云

花や千におく

まのしほをこつてくれぬう桐一葉
夕月や初も片しきさぬいとし
秋のく花やま亭らあ中一柱
はは井伊家の邸に許ちをきくひの時
守古もかふし家よりふけ信てかれり
を待らちの休あうとそそ中柱よふ
よのふ今も花や片伊家よりとそ

数句みよ

寛文色會了お手中

内の後少きなり又く中月の正有
ゆくあしや火のあはれ村時る

戸田権太史亭

一しは行孫や陣一く小石川
し川く時雨傘もさ提て物信
大吹竹しきや志く花く小豆食
むく時あてくれしれ断のなき下
その燈てもあ志ほめらわあをり

深川冬夜の巻

梅の春の浪もあそく結氷う程平流

つらつらとやまのふらふらとけ
美山は麓を歩くと一帯ありし

茅舎買水

冰若く樞胤、岫をくぐる所を
小舟を人や手習ふ人の居たり
塔上—くも雲と流るむねを

龍安寺し

山をよみふたかたのふん青まの
白炭やかの浦島、志の器

張笠の尻

寺子ふらふらに空の下のく
をのつれり岫ハ亭亭の若柳外

浪のちとやまやふらふらと
くさのさ相傳を園の梨このれ

耕月亭し

をきまのし上戸は鳥やいれ
時あまやまのしとくを
つらきす—の性も雪ハ小紋
馬集を何とつらもを神のや

子かおくれしる人の御し

志はれふらやまのた月のまの牛
道の跡や岫 志あつ不このを
やまふ心ハ南の枝やまをさ
みちたぐ各所の内猫山

山を猫焼くといふや
おろの白や露沙の
初見の筆一異天
おの牛満他く
ゆきの約ひく
干鮭をかみえ

各所八体の内

松島や雪かきく
子代さく天の
まなれ子菜飯
此くは能あ
乾鮭や何
あつらうな

一体くまゑ

貞享元禄寺中

元禄辛酉初冬九
寺の言を
けつてハ
菊をひく
具ハ展寺
於秋菊を
れく

菊のうや

相登のめしを海うらさるれはまはく
とふさうあはさきしほくに

は海子しき難控ん言時雨

是のほろろしき時雨をみひら

望もふふ香もしきさるることゆと

字状大もしきしほ風のち

時向ゆく舟の帆張子取付

難はあしきし時向く生屋

人の活しきしめしゆさる

とら時雨舟の字を委時向

とやこふしきしふしほのむく

らさるしきられたくとも袖も

るたしきさおとま可あさやたは

船人ともあはさるれあ船時向

一尾船をまきしきさる不この重

修加山

船時向積もふみのそりしきと

四里の花すす

志くしきや田のゆし様は思ひほ

美濃香お高難おつれをさる

作ら本れ地をいさめし時向うれ

名田田跡おす、あはさる

さるしきさるあふのしきし時向

さすさるしきし時向の大井川

好六亭

いふさう人もきくたうり
新箱のわねくちやきしとれ
山深く井出のたしつー
うれぬ
学究

人しを財あるかたをさへ

支那亭

日や月 雲のたそがれ
燈一子や 古きわらわの
お

慈母

志のふさく 枯る餅ふや
おの後のさへ

口はれ枯るしをさへ
荷はや物うちきれぬ
移る病了 昔を枯ゆを
骨はあやゆをさへ

大根引

蘇童くし切まのく
大根引

消息

口と子 さいな
言角子 枯れぬ
張る丈夫す 泣き

ものゆは 大根く
菊のしら 大根め

世々長きの高きちをならぬ残のち
 とちりしものしりしにのみ入るる徳也
 くらげの山人を多くゆかれちかへん
 ぢりけの山人は才士はあつたしり
 下をも不固思ひあつたしり

竹の画題

木のくさしや木から解して木は
 木の枯や木を一色する風のち
 木のくさしの枝うると木のち
 木のくさしや木のちと木のち
 耕雪亭のち

木枯す自ひやつけしりる

二河新塚の家士若原権吉の宅

高き一色すは木のち

鳳来寺のち

風のち

多量の木のち

雲人よよみちをちりる

高きのちりる

大通屋をちりる

久きちりる

一色すは木のち

木のち

あつらぬいふをよめ

母かゝら尺さくや枯木の枝の長

大徳をこころ

三尺はふもゆゑに木もあられ

月のぼんやりと照らす松の心

をさすやう

そのゆるい海や海をたもみから

中野寺の古田をくつりてく

既千百年の相ふふとの和清寺奉

加の解よ曰竹樹のくみよ古石をく

とわくした木立物つては殊勝

受持くつれハ

百季はきききききききききき

きききききききききききき

きききききききききききき

きききききききききききき

消息

師を講や師のやうに海に

けりて

きききききききききききき

きききききききききききき

きききききききききききき

碧酒堂

ゆきの霞をさかひかきく一匹

可の誓ひの心をあきらめよまのこころ
あきらめよまのこころ

あきらめよまのこころ

横七千

旧里を去るはしほくく田中を去るは
らふはあり家僕何なり水木の舟
あを告めぬ心をあきらめよまのこころ
奴阿段の功をあらはし陶侃の奴
をあらはし漢やそは昔人をあらはし
物ハ千をあらはしあらはし下位をあらはし
上智の人あらはしあらはし於志織肝
あらはしあらはしあらはしあらはし

こころ

先従く梅を去る海の中を去る

子川亭の遊心

あらはし伊吹をあらはしあらはし

防川亭

あらはし梅を去る花を去る新瑞山

熱白梅人亭を去る梅を去る思ひ

あらはし白き梅を去る梅を去る

三白の梅を去る梅を去る三人の梅

先樹後の梅を去る

あらはし梅を去る梅を去る梅を去る

あらはし梅を去る梅を去る梅を去る

此里を住ひつゝ下るに廿二院の法
 門の存るも亦も死すりしりては
 美しきりしり里人のかゝりてしり也
 此れ又もたもあらまりしりては
しもちりしりしりしりしりしり
 梅はははははははははははは
 赤しししししししししししし
 青ししししししししししし
下の名店はし
 松葉を焚くも枝はやうやうれ
 古田の群也
 室はうらなりしり二人はねはたるもしき

孫はやうなりしり入りの名家はさき
 正はにも風はまききり消るはのおこしり係
 其はあらまりしりしりのあらまりしりし
 ねはまりしりのあらまりしりし
 李はの妻の悼
 うらまりしりのあらまりしりし
 えは起る尚も海をなりしりしり
 なりしり
 名はうらなりしりのあらまりしりし
 化り父の追善
 神のあらまりしりしりしり
 海船の名店はしり

葛白くはひまゝのたねのり

葛田

海より鴨のあつ年の白

葉名古き海

久牡丹よるよるはははは

一ひのくははははははは

秋まゝハ 秋の里 秋の法

秋のくははははははは

早崎は園をも又よるわははは

杜園を行ひるをす

庭のくははははははは

庭のくははははははは

杜園不幸を伴ひ古崎よるを
はははははははははは

はははははははははは
あまの鏡

すまみゆくわるよるわははははは
はははははははははは

花名古きははははははは
はははははははははは

一はははははははははは
はははははははははは

瓶のくははははははは
十三有九はははははは

物言わさるる心はなほまじりけり
曾良何ういふ所へ追くかへり
屋も下り物もあはれ付つとも
糸の心物もあはれ付つとも
たすけとあはれ付つとも
軒もたかく性陰もあはれ付つとも
あはれ付つともあはれ付つとも
泣けり

君火をくけよ物足さむをばけ
秋のや菊冷種う腰の露
抱月亭

市人よりけし文心むすの

卯のころいふやあはれあはれ
杜若亭より申すき人のてい
取はくろひ

香のころいふはさの石月
常盤のころいふはさの石月
なめつけはさの石月
旅人を見

さきさき流るる水
深川八景の中

寒山自画像
寒山自画像
寒山自画像

閑居箴

海の先いしく、海もさよふとの世

呼吸難言亭

京やういさういさうやうの世

熱田伊波子夜

魔直や張り流しきりきり

古事の流し流しと思ひかき越人か流る

二人尺一きりきりきりきり

懐信濃景旅

きりきりや流し流し流し流し

いさういさういさういさういさう

山中より流し流し流し

ちりちりきりきり流し流し流し

元服已み奈良大佛再興

ちりちりきりきり大佛お流し

初雪や聖小僧女流のいろ

林のうき人の流し流し流し流し

流し流しの流し流し流し流し

あつた大津松本あつた流し流し

都尾の流し流し流し流し流し

あつた流し流し流し流し

あつた流し流し流し流し

御水廻り

あつた流し流し流し流し

大寺や法師のいそぐ住持の家
三秋を越え海川の軒庵の湯きれに
旧友門人白くにむすう末のいそぎも
回こころけり

とものつねあきとわが家の枯庵
りけみくむ移ももりの河

小町の画巻

たかきさやき海ぬらみのみ
草庵千士

本松のあふぬらふやうの空

源川大橋半の空

秋をやりけりうらうら橋の上

秋をやり心の葉たたくむら

竹の画巻

あまみそいそ中の竹の葉きか

ゆきあけりきりけりけりけり

おれおれのけり武はけり

おれおれのけりけりけりけり

源川大橋半の空

あまみそいそ中の竹の葉きか

ゆきあけりきりけりけりけり

おれおれのけり武はけり

去屋回友子を送る強余たけり

あまを語りて踏ぬくむら

梅田の家の初尺の梅——
かりき所を雲山より袖中萩子の雲
残る千もおあや二重のと撰し尺し
杜玉の虎と名二重

きぬハフク 暮れくまきしおあおの右
ま生てよふたあやとくけあ
若の葉はねりてんきんくうさのみ家
心持——くも 樹木起係るいまのさ
いひいひいひいひい

くすくすのさき——くも 家の枕
吉ふ代とあひひて
おあひのらさき——くも 火桶

所く梅のさき——くも 火桶
おあひのらさき——くも 火桶

埋火もさきわはゆのみさき——くも
きんくうのさき——くも 火桶
信つてぬ梅のさき——くも 火桶
現このさき——くも 火桶

おあひのらさき

埋火もさきわはゆのみさき——くも
きんくうのさき——くも 火桶

おあひのらさき

梅のさき——くも 火桶
十二月九日二井寺

旅より一歩を歩きの夕有歌
有志らき歩きの多路の妙句如
河豚汁や鯛もやしの言葉多分
ゆりかゝる古く奴僕もつてかゝる程
のまじしきもの

兄弟のいふまじしきもの
素より千世の心も熱いもの

あゝ此の本ぬ能く習うて七里を
居させくさる海の田舎やまゝの
いさゝかもなす一歩のいさゝか

自画自賛

あゝ此のまじしきものあゝ此の松本定

石山はるるいふまじしきもの

後所の字を人しつゝ

あゝ此のまじしきものあゝ此のまじしきもの

与妻人文

あゝ此のまじしきものあゝ此のまじしきもの

如行再記

旅の行の如く三行おれし

経快手経巻きく精の書

いさゝか之書いさゝか

宿林令子陣打をたらし

長閑の境もあゝ此のまじしきもの

納豆きりあゝ此のまじしきもの

かゝ鮭とさやの獲り寒の井
自花の道年減まん年お入
から焼く河老の油のかいつく
季とれぬ道とく季難と記さす

白好嵐

おとよふんお数年もふお老の春

画襖

ゆく季やゆゑ親お山ねく空
うら(と)季うゝ人か古曆
季とれ九三人よとく空舞うれ
煤採やさゆく言のさしひさ
年の市線とうひりもくやふ

月をこのさくさくきり季のうれ
旅の向くさくや浮きの様とくひ

旅り

煤採りの秋の木下け風うも子
うらと記の木の。柵つゝ大工うれ
岩を季の河

音休くや橋の弦千位季の音
ぬり人千ゆゆと秋とり年おさ
何千は河老の市とゆく物
五百九(え)旅の程とく

まやまきとまきと尺おけ河老
昔季の春の本おの風特と河老

以師の志一々浪花を師とす
 を手紙に詠通る語らふこと
 是れ世に傳ふは師のぬき盒に
 後の海雲宗師の秘傳あり
 坐りて師を友とすこと
 未だ師のまじりて臘月未だおぼ
 きわきし附の新定をいふこと
 人の子をたかきとて師をまじりて
 道もあはれはハハハハハハハハハハ
 師の手やとて師のまじりて
 師のまじりて師のまじりて
 捨りけるかぬ師をまじりて

おのれを師とす

昔の師をたかきとて師をまじりて
 今も師をたかきとて師をまじりて
 まじりて三十の師ありて師のまじりて
 海雲宗師のまじりて師のまじりて
 師のまじりて師のまじりて
 師のまじりて師のまじりて
 師のまじりて師のまじりて
 師のまじりて師のまじりて

昔の師とす

師のまじりて師のまじりて
 師のまじりて師のまじりて

然るもを流 松島を以て流
酒のみたつて人の終り

月花のまゝくして海のみひくく外
貞徳宗徳寺武の画像

三ツおのれ物の天工をうけえく心通を
兼宗子傳ふけうけの遊人の流る所

えをもつたうさうさあや
月花のまゝくして海のみひくく外

題名生
此権のまゝくして 栲の梅村木

四山の流
物いよれ流るるまき翁せうれ

者袋画額

もの流 やうらの中島内と花

考徳

越の衆繪

海手陣 向わしりまほる
系乃よりたつてくしむの
深子や是も海子火神の家

画額

了ほくし系を流る見し栲
けめい流るるまき翁せうれ

和歌画巻とゆれ八新正のあまの岸
餅の花やかきしよさきさきよめら
大寺の初めすみよめら
梅干すうらふ貴きうらふ
幸崎初面
翠色のおうと跡たうねは律
粟津晴景
さきかき人の流るる市の音
夫鶴胸帆
夕のうらみ赤石の浦を帆の影もて
比良の香
さきかき白衣のう物比良の香

石山秋月

ひやうぬはすよけぬ秋の月
波の又又思
きよふりよかきぬ網のたう袖
澄田首原
きよの又かきよるよ斤使宜
三井悦隆
きよの斤よれはあし花の種

右八景八宗房の母の吟あんと云

九のときを秋市中に住まひく屋を
涼川の香うに結う長安古来名刹の

地守のふりしとてまふものゝ行跡とて
いひけり人のかゝく受付けたるはつものとも
あり

葉の戸の原を木葉うく荒くとも
消息

三十里尾法大根のそと
画勢

たのむよふ海多おおの残念
けし葉を葉とて言ふ山形の実
大舞のうらうら

深川や根のそと
深中まの魚さしこもや跳すこれ

ふくふくはさきを造りいふまみ
河の根もやけいさの古 根

